自然と人間の闘争

～「自然」概念をめぐるB. Ф. オドエフスキーのシェリング受容について～

久野康彦

1．ドイツ観念論とドイツ・ロマン主義における「自然」[1]

「自我」と「世界」、「人間」と「自然」といった二元的関係において世界をどうとらえてゆくか———この問いに答えることは、カントからヘーゲルに至るドイツ観念論の大きな課題であった[2]。

カントの批判哲学の後を受けて、主観の圧倒的優位を唱え、初期ロマン派の純粋自我という考え方に大きな影響を与えたのはフィヒテだった。彼は、「絶対的自我（absolutes Ich）」を、何ものにも依存しない根源的な行為の主体として世界認識の根底に据える。そして、自然は「我にあらざるもの」、すなわち「非我（Nicht-Ich）」であって、自我の意識の中で「定立」される二次的な存在とみなされた。

一方、フィヒテが主張するように自然を単に自我によって所産された存在とは見なさず、それを「生ける自然」、すなわち生命体として自我と同一のものであると考え、自我と等しい重みを与えたのがシェリングだった。彼によれば、自然は「目に見える精神」であり、精神は「目に見えない自然」であって、この内なる精神と外なる自然とは「根源的同一性」をなす。こうして、自然が自我に至る過程を研究する「自然哲学(Naturphilosophie)」と、自我が自然に至る過程を研究する「先験哲学(Transzendentalphilosophie)」が並行して成立し、さらにそれは自然と精神の絶対的統一を体系の原理とする「同一哲学（Identitätsphilosophie）」へと発展してゆく。ノヴァーリスを始めとする「フィヒテの自我哲学に共鳴しつつも、その自然哲学の欠如に不満を感じていたロマン主義者たち」に大きな刺激を与えたのは、このようなシェリングの哲学、とりわけその「自然哲学」であった。

「ロマン派の詩人たちも、まずはフィヒテの自我から、つまり精神の側から出発する。だが、フィヒテが切り捨てなければならなかった自然を、もう1度精神と結び合わせ、一体化せしめること、精神を純化された自然、そして自然を精神の自己展開として捉え直していくことが、彼らの課題となるのである。その第1歩が、シェリングの自然哲学であった。」[3]

---

[1] 本稿では、ドイツ観念論とドイツロマン主義に関しては以下の文献を参照した。シュヴェーグラー『西洋哲学史』下巻、谷川徹三・松村一人訳、岩波書店、1958。小泉文子『鏡の中のロマン主義』、勁草書房、1989。『講座ドイツ観念論④　自然と自由の深淵』、弘文堂、1990。『ドイツ・ロマン派全集第20巻。太古の夢　革命の夢。自然論・国家論』国書刊行会、1992。大橋良介『絶対者のゆくえ。ドイツ観念論と近代』、ミネルヴァ書房、1993。

[2] むろん「自然」の問題そのものは、古代ギリシア以来、哲学における根本的問題の1つだった（см. ミシェル・アンパシュ『自然の哲学』桐山稔訳、白水社、1975）。しかし、ここではオドエフスキーに関係の深いドイツ観念論とドイツロマン主義にのみ簡単に触れておくことにする。

[3] 薗田宗人『自然と国家の詩学』（『ドイツ・ロマン派全集第20巻。太古の夢　革命の夢。自然論・国

2．ロシアにおけるシェリング受容について

しかし、ドイツ本国以上にシェリングの哲学に熱狂を示し、大きな影響を受けた国があった。それはロシアである。

「これは遠い昔、シェリング哲学が最も華やかなりし時のことだ。シェリング哲学がかつてロックのラプソディーの単調な旋律のもとで眠り込んでいた人々にどれほどの影響を及ぼし、どれほどの衝撃を与えたかは君たちには想像できないだろう」（PH、15）

このようにオドエフスキーは自分の小説の登場人物の一人に語らせている。19 世紀前半、シェリングの哲学は後世からは想像しがたいほどロシアの知識人たちに大きなインパクトを与えたのである。

それではロシアにおいてはどのようにシェリング哲学は受容されてきたのだろうか。 カーメンスキーは、シェリング哲学の流れを汲むロシアの思想学派（彼は「弁証法的観念論（диалектический идеализм）」、または「啓蒙主義的観念論（просветительский идеализм）」と呼んでいる[4]）の発展の歴史を３段階に分けて説明している[5]。まずそれを見てゆこう。彼によれば、第１段階は、この学派の形成期で、19 世紀の初頭から 20 年代半ばにかけて、Д.М.ヴェランスキー[6]とM.Г.パヴロフ[7]という２人の人物によって代表される。第２段階は、20 年代半ばから 30 年代半ばにかけての時期で、A.И.ガーリチ[8]と、より若い世代のB.Ф.オドエフスキー、Д.B.ヴェネヴィーチノフ、H.B.スタンケーヴィチ、H.И.ナデージディンたちが主な担い手である。この時期に、シェリング哲学などの観念論がより広い層に浸透すると同時に、学派の関心の方向も変わってゆく。第３段階は、30 年代半ばから 30 年代末に至る時期で、第２段階でも名前の挙がったA.И.ガーリチ、H.B.スタンケーヴィチ、H.И.ナデージディンたちで代表される。これは、学派の発展的解消の時期であり、それがA.И.ゲルツェン、B.Г.ベリンスキー、H.П.オガリョーフなど次の思想潮流に受け継がれてゆく時期である。

家論』、p.353）

[4] B.И.サハロフはこの学派を「ロシア・シェリング哲学（русское шеллингианство）」と呼んでいる。см. *Сахаров В.И.* О бытовании шеллингианских идей в русской литературе. —— В кн.: Контекст 1977. Литературно-теоретические исследования. М., Наука, 1978, с.211

[5] *Каменский З.А.* Московский кружок любомудров. М., Наука, 1980, с.3-11.

[6] Велланский, Данило Михайлович (1774-1847)。哲学者。ペテルブルクの外科医科大学で学び、1808 年に医学と外科の博士号を取得。1809 年のドイツ留学時にシェリングの講義を聴き、帰国後ロシアで最初の自然哲学者になる。

[7] Павлов, Михаил Григорьевич (1793-1840)。哲学者、自然科学者。1820 年からモスクワ大学の教授。その教育活動・講義は若い世代に大きな影響を与えた。

[8] Галич, Александр Иванович (1783-1848)。哲学者、美学者。1808 年のドイツ留学以降シェリング哲学に熱中し、帰国後ロシアに彼の哲学を広める。1817 年からペテルブルク大学哲学科客員教授（1837 年まで）。

カーメンスキーによれば、ヴェランスキーとパヴロフによって代表される第１段階では、精神の哲学（философия духа）（人間と社会に関する理論、例えば歴史哲学、倫理学、美学）にはあまり関心が持たれず、もっぱら自然哲学・存在論、あるいは認識論上の方法論に注意が向けられていた。その理由は、ヴェランスキーとパヴロフの２人が自然科学者であって、ロシアの自然科学の発達という社会的要請に答える必要があったためとされている。この時期のシェリング受容はまだこのようなアカデミックな研究のレベルにとどまっていた。

しかし、それに続く第２段階では、ガーリチが 1819 年ぐらいから自らの著作や教育活動でこの学派の新しい方向を示したのに続き、オドエフスキー、ヴェネヴィーチノフらのより若い世代が台頭してくる。彼らの多くは、「愛智会（Общество любомудрия）」というサークルに集まりシェリングやオーケンなどのドイツ哲学を研究すると同時に、文集『ムネモジーナ（Мнемозина）』（1824-5）などを媒体にして観念論哲学をロシアのより広い層に広めてゆくのである。

この第２段階が第１段階とは異なる大きな点は、主要な関心の領域が、自然哲学の領域から精神の哲学の領域に移ったことである。カーメンスキーによれば、その転換の理由は、「精神の哲学に対する切実で燃えるような関心は、ロシアの生活そのものによって駆り立てられ」、またこの問題は「学派が出現するずっと以前からロシア哲学によって集中的に検討されていた」ためであった。

一方、このようなロシアにおける観念論の流れの中で、サハロフは、シェリング哲学はロシアの知識人たちに「何よりも自由の哲学、すなわち時代遅れの古い理想からの自由、新しい理想を創造する自由の哲学」として受け取られたと説明している。彼によれば、初期シェリング哲学はロシアの哲学者たちが「啓蒙思想家たちのスコラ的な合理主義と古典主義の規範的な詩学」から逃れるのを助け、「存在と人間に新解釈を施す」のを可能にした点で当時大きな意味を持ったのである[9]。

カーメンスキーの説明にせよ、サハロフの説明にせよ、ロシアではドイツ・ロマン主義におけるほど「自然哲学」が重視されたのではないという点は注意する必要がある。このようなロシアのシェリング受容の流れの中に、名門貴族の家系に生まれ、作家、哲学者、音楽批評家、ジャーナリスト、教育家、社会活動家、官吏など多彩な顔を持つВ.Ф.オドエフスキー(1804-1869)も位置づけられる。彼は先に触れたロシアの観念論の第２段階の代表的人物であり、「愛智会」の議長を務めるとともに、様々な哲学的著作でシェリング哲学への傾倒を示した人物である。それらの哲学的著作は、主として「1820 年代」と「1830 年代から 1840 年代後半まで」という２つの時期に分けられる[10]。以下この区分に沿って、それぞれの時期に彼が「自然」という概念をどうとらえていたかという問題を考察してみたい。

---

[9] *Сахаров*, указ. соч., с.214.

[10] cf. *Cornwell N.* The life, times and milieu of V.F.Odoevsky 1804-1869. London, Athlone Press. 1986, p.75-6

３．１８２０年代におけるオドエフスキーのシェリング体験と「自然」理解

オドエフスキーが初めてシェリングへの関心を表明したのは、文献で確認できる限り、1823年のことだった。この年、オドエフスキーは友人В.П.ティトフに宛ててこう書いている。「僕が、今、目にするどんな些細な現象や偶然でも一般化するという習慣があるのは、シェリングのおかげなのだ。」（8月20日付）[11]。しかし、このシェリングからの影響の告白は、興味深いことに、直接シェリングの本を読んでのことではなかった。同年、同じくティトフ宛の別の手紙で彼はこうも述べている。「僕はまだオーケンも、シェリングも読んでいない。というのも、今までそれを手に入れようとする僕の努力は無駄に終わったからだ」(7月16日付)[12]。このようにシェリングの本を読む前にその哲学の知識を得ていたのは、いわば「ロシアの解釈者たち（русские интерпретаторы）」（カーメンスキー）から彼が知識を得ていたためであった。オドエフスキーは1816年から1822年にかけてモスクワ大学貴族学校に在学したが、そこではパヴロフやИ.И.ダヴィドフ[13]が講義をし、ドイツの新思想を紹介していた。またおそらくヴェランスキーの著書もオドエフスキーは読んでいたと思われる。このような事実が重要なのは、オドエフスキーの思想を単純にシェリング哲学と同一視することは危険であるということを示しているからである。そもそものシェリング受容の出発点において先行者のシェリング理解のバイアスがかかっているという点、そしてオドエフスキー自身もまた独自の思想家であろうとした点を考え合わせると、シェリング哲学とオドエフスキーのその理解との間にいくらかズレが生じてもおかしくはない。そして、「自然」概念をめぐる両者の考え方にこそ、このズレは現れているのである。

ではこの時期、オドエフスキーは「自然」をどのように位置づけていたのだろうか。カーメンスキーによれば、初期オドエフスキーの思想の出発点をなしていたのは、「知的直観の思想と、それに基づく**絶対者**（Абсолют）というプラトン的な客観的観念論の概念」であった。「絶対者」は「あらゆる対象の本質」であって、「唯一のもの（единое）」「完全なもの（совершенное）」「存在（сущее）」「無条件者（Безуслов）」と同一視された。そしてオドエフスキーがとる基本的な立場は、「伝統的なプラトニズムと同じく現実的なものに対する観念的なものの根源性を認める」というものであった。すなわち、「抽象的なものと物質的なものの完全な同一という観念」は「絶対者（Абсолют）」であって[14]、「抽象的なもの」と「物質的なもの」、つまり「精神」と「自然」は、「絶対者」という、より高次の観念的な概念において一致すると彼は考えた[15]。これはおおよそではシェリングの同一哲学に合致していると考えられる。

しかし、この時期に書かれたとされる論文『存在、あるいは存在するもの（Сущее, или существующее）』の「存在（сущее）の理論の概略」の項では多少異なる面が見られる。まず

---

[11] *Сакулин В.И.* Из истории русского идеализма. Кн.В.Ф.Одоевский. Мыслитель. Писатель. т.1 ч.1, М.. 1913, с.132

[12] там же, с.132

[13] Давыдов, Иван Иванович (1794-1863)。哲学者。モスクワ大学の物理数学部と史学文学部で学ぶ。モスクワ大学やモスクワ大学貴族学校で、哲学、数学、文学を教える。思想的にはヴォルテール哲学と初期カントを総合しようとする折衷的な立場をとるが、新思想の紹介者でもあった。

[14] Афоризмы из различных писателей по части современного германского любомудрия —— Мнемозина, 1824, ч.2, с.82

[15] *Каменский,* указ. соч., с.18.

この論文では「それなくして他のものもあり得ない認識」は「自我（Я）」と「非我（Не-Я）」であると規定される。そして、前者は「人間」、後者は「あらゆる対象」を指すとされる。次いで、あらゆる対象にとって共通のものは「存在（сущее）」であり、すべての人間が「非我」や「存在」を認識しうると語られる。しかし、このような議論を受けて最後に述べられるのは、「存在（сущее）は自然（природа）という境界で終わる。ここに思考の世界の第1段階がある」ということである[16]。カーメンスキーはここで自然は「2次的なもの」とみなされていると判断している[17]。

こうして見ると、オドエフスキーは、シェリングやドイツのロマン主義者たちとは違い、「自然」という概念そのものにはそれほど関心を示していないといってよいだろう。この時期の彼にとって大事なのはむしろ「絶対者」という考え方であって、彼はそれをかなり宗教的な形式で理解していた[18]。ここには「自然哲学」よりは「先験哲学」を重視する傾向、あるいはプラトニズムへの傾斜が見られる。このようなシェリング哲学に対する微妙な理解のズレは、後の1830年代から1840年代後半までの時期によりはっきりとした形をとってゆく。

4．１８３０年代から１８４０年代後半までのオドエフスキーの「自然」理解 ～１８４４年の『ロシアの夜』を中心に～

1830年代から1840年代にかけてのオドエフスキーは通常「ポスト・シェリング主義」の時期と考えられている。実際、デカブリストの乱の影響で「愛智会」が解散したのち、オドエフスキーを始めとしてその元のメンバーはみな次第にシェリング哲学から距離を置き始める。一方、この時期は、ドイツではシェリングからヘーゲル、ヘーゲルからヘーゲル左派へとめまぐるしく思想上のヘゲモニーが移り変わっていた時期でもあった。そして、1844年、マルクスが『ヘーゲル法哲学批判』、エンゲルスが『国民経済批判大要』を発表して、ヘーゲル批判を行ったまさにその時に[19]、オドエフスキーの代表作『ロシアの夜（Русские ночи）』が発表される。古代・中世・現代の文学、音楽、哲学、自然科学、経済学などの様々なテーマを「枠物語」の形式で論じたこの作品は、いわば「社会の精神状態の温度計」(PH、154)として、シェリング哲学を取りまくこのような状況をも敏感に反映する。そこに見られるのはロシアの知識人たちがシェリング哲学に熱狂した1820年代とはもはや全く異なる状況である。

「『ロシアの夜』において描かれている時代は、シェリング哲学が真理の探求者を満足させられなくなり、彼らが様々な方向に散っていった、19世紀のある時期である」（PH、第2夜の脚

---

16 Русские эстетические трактаты первой трети XIX века. т.2, М., Искусство, 1974, с.168

17 *Каменский*, указ. соч., с.17-19.

18 там же, с.18-19.

19 これに関連して、1843年、ベルリンでシェリングに会った後、オドエフスキーは後期シェリングの反動哲学を攻撃したエンゲルスのパンフレット『シェリングと啓示』をロシアに持ち帰っているという事実は極めて興味深い。см.*Сахаров*, указ. соч., с.224-5.

注[20]、15)

それでは、この時期のオドエフスキーの「自然」理解は一体どのような展開を見せていたのだろうか。以下『ロシアの夜』を中心にして、この問題を考えてゆこう[21]。

『ロシアの夜』で「自然（природа）」について論じられている箇所を見ると、通常ロマン主義の特徴とされる「有機的自然観」とは、かなり異なったものが見られる。

「一般的な見解に反して、僕は時々外的自然（внешняя природа）まで降りてゆくことも詩人には有益だと信じている。それは、少なくとも自分の内面の優越性を確信するためであり、さらに人間にとって恥ずかしいことだが、自然という書物の文字は人間の言語におけるほど変わりやすくも曖昧でもないということのためである。そこでは文字は不変で決まり切ったものなのだ」（第６夜、ﾌｧｳｽﾄのｾﾘﾌ、86）

「自然には意志（воля）がない。自然は、永遠に変わらぬ必然性の産物だ。植物は数千年前も、今日と同じように咲いていたのだ」（ｴﾋﾟﾛｰｸﾞ、ﾌｧｳｽﾄのｾﾘﾌ、142）。

このような自然観は、シェリングやノヴァーリスが考えるような「生命」を有する動的な有機的自然観というよりは、むしろ「必然」に支配された静的な機械論的な自然観に近い。概して『ロシアの夜』では、「自然（природа）」という言葉にвнешняя, грубая, материальная, вещественнаяといった形容語句がつくことが多く、この印象を強めている。ほんの数回、オドエフスキーは「生ける自然（живая природа）」という言葉を使う時もあるが（第２夜『希求（Desiderata）』[22]、20；ｴﾋﾟﾛｰｸﾞ、141）、それは自然一般を指すのではなく、原則として「有機体」と同義で使われる表現である。一方、このような「外面的」で「物質的な」自然と対比される形で強調されるのは、人間の精神の独自性である。

「君は、自然の産物を、人間の暗く冷たく無力な領域と比べているから、自然にまで成り下がった人間に自然が勝つと言うことになるのさ。けれども、どんな自然の産物が人間の魂という明るい、赤々と燃える炉の産物まで達し得るというのかね。人間の精神は、自然と同じ根源に基づいて、自然の中にある現象と同じような現象を作り出す。だが、それを、自発的に、無条件に行うのだ」（第７夜、ﾛｽﾃｨｽﾗｰﾌのｾﾘﾌ、98）

「第２に、僕は次の２つの書物を読むことを勧めるね。そのうちの１つは自然と呼ばれている

---

[20] オドエフスキーは、1860年代始め、『ロシアの夜』の再版（結局実現しなかった）のために、新たに注釈や訂正、補足などを準備した。この脚注は、そのうちの１つである。

[21] 『ロシアの夜』は、複数の短編とそれをめぐる４人の友人たちの対話から構成されている。対話の部分に関していえば、異なる思想傾向が設定されているファウスト、ロスティスラーフ、ヴィクトル、ヴャチェスラーフという４人の人物たちの発言をそれぞれ単純にオドエフスキーの見解ととることはできない。しかし、議論のまとめ役のファウストのセリフは、おおよそオドエフスキーの思想を反映していると考えてほとんど問題はないと思われる。一応厳密を期して、対話の部分は原則として発言者の名前を明記して引用することにする。

[22] 第２夜でファウストが、かつての「２人の友人たち」が残したものとして読み上げる原稿を指す。

ものだ。それは、かなり読みやすい字体とかなり分かりやすい言語で印刷されている。もう1つは、**人間**という手書きのノートで、少ししか知られておらず、しかも難しい言語で書かれている。まだそのための辞書も文法もないだけになおさら難解なのだ。この2つの書物は互いに関係し合い、一方がもう一方の説明となっている。しかし、後者の書物を読むことができるなら、前者の書物はなしですませばいい。しかし、前者の書物は後者の書物を読む助けにはなるのだ。」（エピローグ、ファウストのセリフ、178）

このような記述からわかるのは、オドエフスキーは「自然」と「人間」の根源的同一よりは、むしろ根源的差異に力点を置いているということである。すなわち、ここで彼は、自然と精神の統一を唱えるシェリング哲学を、かなり独特な形で、時にはシェリング自身の意図に反するほどに読み替えているのである。その点興味深いのは、『ロシアの夜』で述べられているシェリングの評価である。

「19 世紀初頭のシェリングは、15 世紀におけるクリストファー・コロンブスと同じだった。彼は、それについては遠い昔の伝説のようなものしかなかった人間の世界の未知の部分――すなわち、**人間の魂**（душа）を明らかにしたのだ。」（第2夜、ファウストのセリフ、15-6）

「人間の魂」の発見――これこそがオドエフスキーがシェリングの中に見いだした最も重要な功績であった。先に触れたように、ノヴァーリスを始めとするロマン主義者たちにとって、シェリングは「生ける自然」という新しい自然像を提示したことが大きな意味を持っていた。それに対し、ここでは全く異なっていて、**新しい人間理解**をもたらしたという点でシェリングが評価されているのである。ここでも、1820 年代にすでに見られた「自然哲学」よりも「先験哲学」重視という傾向を見て取ることができるだろう。それゆえ、通常ロマン主義に典型的なものとされ、シェリングの自然哲学と相通じるところもあるとされる「自然神秘主義」[23]は、オドエフスキーとは全く無縁なものとなる。

それではオドエフスキーが「自然」と「人間」の根源的差異を強調しているというならば、それは何にあるとされているのだろうか。彼はそれを「有機体（организм）」というメタファーを使って説明する。ファウストの定義によれば、「有機体」とは「普通、特定の目的でもって働いているいくつかの基礎、あるいは要素」（エピローグ、177）である[24]。このような「有機体」という概念を諸現象のメタファーとして用いることは、この時代のロマン主義の思想に典型的なものであった[25]。しかし、オドエフスキーが、例えばシェリングなどと違うのは、彼はこの「有機体」というメタファーを、「自然」と「人間」の根源的同一性を強調するために使うというよりは、むしろ「自然」に対する「人間」の独自性を説明するために用いる点である。自然は「外面的」で「粗雑」で「物質的」であるのに対し、「人間は、有機体であって、自己が発達するため

---

[23] см. フランクリン・L・バウマー『近現代ヨーロッパの思想。その全体像』鳥越輝昭訳、大修館書店、1992、p.389-99。H・G・シェンク『ロマン主義の精神』生松敬三・塚本明子訳、みすず書房、1975、p.209-29。
[24] 同様の定義は、『有機体（организм）』と題された草稿でもなされている。см. PH, с.243-5.
[25] см. フランクリン・L・バウマー、前掲書、p.380-425

の場所と時間を必要とする諸要素からなる」（ｴﾋﾟﾛｰｸﾞ、ﾌｧｳｽﾄのｾﾘﾌ、179）。そして、「有機体にとって必要なのはその完全な発達である。そうでなければ生の完全な状態（полнота жизни）はないのだ」（ｴﾋﾟﾛｰｸﾞ、ﾌｧｳｽﾄのｾﾘﾌ、178）という以上、人間＝「有機体」をなす諸要素を完全に発達させ、「生の完全な状態」を獲得することが、自然と異なる人間の使命となる。こうしてオドエフスキーは「有機体」というメタファーで人間の独自性と使命を語ってゆくのである。

しかし、この「有機体」というメタファーは、『ロシアの夜』ではさらに２つの領域に拡大されて適用されている点にも注意したい。１つは、芸術に対してである。「人間に与えられている特権は、特別な世界を創り出すということである。その世界では、人間は、どんな割合によっても、本当のありのままのバランスによってでさえ、基本的要素を結びつけることができるのだ。この世界は**芸術**や**詩**と呼ばれている。」（ｴﾋﾟﾛｰｸﾞ、ﾌｧｳｽﾄのｾﾘﾌ、180）。こうして芸術は、「有機体」の諸要素が理想的に結合される場となる。

そして、もう１つ、より重要なのは、社会・国家に対してもこの「有機体」というメタファーが適用されているという点である。「もし２人の人間が友情か愛で結ばれているならば、新しい有機体が生じ、その中で、個々の有機体の要素は、酸がアルカリと混ざることで合一される（変成する）ように、合一されるだろう。もし婚姻という有機体に第３の有機体が加わるならば、再び構成要素の間に新しい作用が生じる。そして、それは、いろいろな経過をたどって、社会全体まで至る。社会全体は、今度は自分が他の有機体からなる新しい有機体となるのである。」（ｴﾋﾟﾛｰｸﾞ、ﾌｧｳｽﾄのｾﾘﾌ、179）[26]

これはいわゆる「社会有機体説」[27]に合致する考え方だが、オドエフスキーはこの発想で「西欧とロシア」という問題もとらえてゆく。ファウストによれば、自分の要素に閉じこもり、一面的な要素しか発展させられず、他民族の要素を理解できなくなった「閉鎖的な有機体（замкнутый организм）」がヨーロッパである。一方、ピョートル大帝によってヨーロッパの要素（стихия）を取り入れ、それによって「有機体」としてあらゆる要素を発展させる能力を開花させたのがロシアであるとされる（180-1）。興味深いことに『ロシアの夜』において「有機体」と「ロシア」という言葉が頻繁に登場して両者が議論の対象となるのは、エピローグの最後の部分になってやっとである（177-83）。最後のクライマックスの有名な言葉「19 世紀はロシアのものだ」は、直前のこの「有機体」の議論と、「西欧とロシア」という民族・国家に関する議論を受けて現れることを考えれば、「有機体」と「社会・国家」という連関が『ロシアの夜』においていかに重要な意味を持っているかということがわかるだろう。

このようにしてオドエフスキーは人間・芸術・社会、あるいは「西欧とロシア」という民族の問題を「有機体」というメタファーで理解しつつ、『ロシアの夜』に収録されている諸短編でさえ同様な発想で総括してゆく。

「とにかく、諸要素の間に平衡と調和がなければ、有機体は苦しむのだ。〈…〉意志の発達も、創造の才能も、超自然的な知識も、それがあらゆる力の手段を持つ国家であろうと、ベートーヴ

---

[26] 『有機体（организм）』と題された草稿にも同様の記述がある。см. PH, c.243-5.

[27] см. バウマー、前掲書、p.407-16

ェンやバッハと呼ばれていようとも、有機体は苦しむ。なぜなら生の完全な**状態**（полнота жизни）**を実現して**いないからだ（ｴﾋﾟﾛｰｸﾞ、ﾌｧｳｽﾄのｾﾘﾌ、180）

こうして『最後の自殺』や『名前のない町』における国家の滅亡、『ベートーヴェン最後の四重奏』『セバスチャン・バッハ』における芸術家の苦悩、『即興詩人』における超自然的認識力を持った詩人の不幸などは、このように「有機体」における「生の完全な状態」の欠如ゆえとして理由づけされる。こうして「有機体」という概念は『ロシアの夜』を貫く根本原理となっているのである。

しかし、やや話がオドエフスキーの「自然」理解からそれて広がりすぎたかもしれない。当初の問題設定に立ち戻ろう。すなわち、ではこのようなオドエフスキーの思想体系において結局「自然」とはいかなるものと考えられているのだろうか。これまで見てきた限りでは、オドエフスキーの自然観は、シェリングやノヴァーリスなどの有機体論的な自然観よりも、むしろデカルトやホッブズ、ニュートンやラ・メトリなどに象徴される 17 世紀半ばから 18 世紀半ばにかけての機械論的な自然観に近く見える。その点では、彼自身がいかにその影響を否定しようとも、彼は 18 世紀の啓蒙思想家たちの発想を引きずっているといえるだろう。

しかし、同時に、彼は近代科学、及び近代技術（通常機械論的な自然観を特徴とする）における自然の対象化支配にも与していないということも強調する必要がある。それがはっきり現れているのは以下のような箇所である。

「奇妙な風景だ！　窓の外では荒々しい**自然**が猛威をふるい、寒さや嵐や死でもって**人間**を脅かしている」（第１夜、9）

「職人として、**我々**はあれこれの道具を手に取るが、**自然**は**我々**をあざ笑い、一歩前に進む度に２歩うしろに押し戻すのだ」（第２夜『希求』、20）

「鉄道は重要で偉大なことだ。これは、**自然**に勝利を収めるために**人間**に与えられた道具の１つなのだ。時間と空間を消し去ろうとするこの欲求の中に、**人間**の尊厳の感情と**自然**に対する優越感がある。もしかしたら、この感情の中には、**人間**の以前の力と、**人間**の以前の奴隷、つまり**自然**についての思い出があるのかもしれない。」（第３夜、ﾌｧｳｽﾄのｾﾘﾌ、35）

「この戦友が現れると、しばらくの間おとなしくしていた**自然**の力が目覚めた。後へは退かぬ恐ろしい敵たちは、仮借なく**人間**に襲いかかり、ゼウスと戦った巨人たちのように、生と死、意志と必然、運動と静止に関する恐ろしい質問を山ほどして人間を打ち負かしたのである」（第８夜『ﾊﾞｯﾊ』、120）

このような自然は、決して人間によって完全に認識され支配される単純な機械論的な自然であるとはいえない。逆に人間の力に逆らい、時には激しく反抗する奇妙なまでに「生命的な」自然である。ここには、「人間」と対立し闘争するという「自然」像が現れているのである。それでは、今までの考察の流れからすると幾分唐突にも見えるこの闘争的な自然像は、一体何を意味するのだろうか。またこれは、今まで述べてきた一見機械論的な自然観や人間の独自性の強調とどのように関連しているのだろうか。

オドエフスキーの面白い点の１つは、ある抽象的な理論や概念に関する自分の思想を、純粋な論文ではなくフィクションという形で表現するのを好むということである。そして論文よりもむしろこのような「フィクション」の方に彼の思想がはるかによく現れていることが多い。例えば、架空の４人の人物の対話と短編から成る『ロシアの夜』がそうであるし、またマルサスやベンサムの理論に対する激しい批判を小説で表現しようと思ったのはおそらく文学の歴史の中でも彼一人だけだろう。人間に対し闘争的な自然像という問題も同様であって、それが最もよく説明されているのは、実は論文的記述というよりも、むしろ通常「ユートピア小説」として分類されることの多い作品群なのである。それゆえ、次の章ではそれを採り上げて考察を進めてゆくことにしよう。

５．オドエフスキーの「ユートピア小説」における「自然」と「人間」

オドエフスキーは、いわゆる「ユートピア小説」を４つ書いている。『地球の生活における２日』(1828)、『名前のない町』(1839)、『4338年』(一部1840、全体の発表は1926)、『最後の自殺』(1844)である。

このうち『ロシアの夜』（1844）に収録されている『最後の自殺（Последнее самоубийство）』と『名前のない町（Город без имени）』（初出は1839）は、両者とも当時のヨーロッパの代表的な経済学者の理論を小説化したものであるという点で同系列の作品と見なすことができる。『最後の自殺』は、人口は幾何級数的に増加するが、食料は算術級数的にしか増加しないというイギリスの経済学者マルサスの理論に基づいて、飢餓に苦しみ人間性を失った人類の終末の状況を想像した物語である。一方、『名前のない町』は、イギリスの思想家ベンサムの理論に基づき「利益」を第１原理として建設された町ベンタミアが繁栄の後に没落してゆくさまを描いた作品である。「自然」と「人間」という観点から見ると、この２つの作品は「物質的な自然に一面的に没頭することが人間の魂にとっていかなる影響を与えるか」（PH第７夜、ﾌｧｳｽﾄのｾﾘﾌ、101）という問題意識を社会にまで広げてフィクション化した作品であるといえる。すなわち、マルサスの人口理論やベンサムの功利主義は「物質的自然の法則に対する崇拝」（PH第７夜、101）であって、人間がそのような物質的な自然の法則に隷属し、己の独自性を忘れ、利己的な算術ですべてを把握しようとするとき、いかに非人間的な社会が到来するかを想像して描いたものがこれらの作品なのである。そして見逃してはならないのは、まさにこのような社会が実現したときに、人間に対する自然の復讐が行われるという点である。

「一瞬のうちに炎が輝いた。崩壊する地球の轟きは太陽系を揺るがせた。アルプスやシンボラゾの破裂した山塊は空中へとはね上がり、何人かのうめき声が上がった……さらに……灰が大地に戻ってきた……すべてが静まった。そして永遠の生は初めて後悔したのだった！」（PH第４夜『最後の自殺』、58）

「人間の前に思いがけぬ破壊的な自然現象が現れた。嵐、有害な風、疫病、飢餓……。辱められた人間はそれに対し己の頭を垂れ、一方自然は、人間の力によって抑えられることもなく、人

間の以前の努力の賜物をたった一吹きで滅ぼしたのである。」（PH第５夜『名前のない町』、69）

なせ自然が人間に復讐するのか。それは「人間の力なくして自然に生はない」（PH第２夜『希求』、24）のに、人間は己のエゴイズムに血迷っているからである。こうして『最後の自殺』と『名前のない町』では、人間と自然の、救いのない凄惨なまでの否定的な関係が描かれることになる。

一方、より大規模なスケールで、より肯定的な方向を示唆する形で「人間」と「自然」の関係を扱った作品が、未完の小説『4338 年。ペテルブルク書簡（4338-год. Петербургские письма）』である。

この作品は、メスマーの動物磁気に熟達し、未来の任意の人物に自由に乗り移ることができるようになったある催眠術師が、催眠状態のうちに書き記した記録という形をとっている。その催眠術師が転移したのは、イポリット・ツィンギエフという名の中国人の学生であり、物語は、彼がペテルブルクから北京にいる友人に送る書簡という形で進行してゆく。時は 4338 年。啓蒙の国ロシアは世界文化の中心となり、若き後進国中国はロシアに追いつかんとして努力している。

この未来の世界で最も輝かしく描かれているのは、様々なテクノロジーの産物による自然の征服というモチーフである。ヒマラヤ山脈やカスピ海の下にはトンネルが開通し、「電動列車」が駆け抜けている。汽車に代わって交通の主役となった「電動気球」が空を征服し、巨大な送風機が地球の気候でさえ自由自在に変えている。暖房装置付きのドーム公園は地上に存在するあらゆる動植物を一堂に集め、子馬は愛玩用に人間の手によって子犬ぐらいの大きさにされている。遠く離れていても人々の会話は「磁気通信」によって可能であり、照明効果に加えて植物に化学的作用を及ぼす電気装置が室内庭園では太陽の代わりをしている。上流社会の人々は、「弾性クリスタル」製の服を身にまとい、ワインの代わりに飲まれている芳香性気体飲料や催眠状態を誘発する磁気浴槽などの人体に全く無害な娯楽を楽しんでいる。こうして『4338 年』は、進歩した技術の成果を用いて、人間たちが様々な形で自然を思い通りにしている様を、豊かな想像力と的確な未来予測（その予測のいくつかは現在実現している）のうちに描き出している。

もっともこのような輝かしい未来のテクノロジーの成果の列挙が逆に仇になってか、概して『4338 年』という作品は、科学技術の未来予測は進歩的だが、社会制度の未来予測は保守的であって、楽天的で静的なユートピア像を描いていると見なされがちである（サクーリン、ツェフノヴィーツェル、ムラヴィヨフ、スーヴィン）[28]。確かに、『4338 年』において未来世界の輝かしい技術の進歩を提示するという意図がオドエフスキーにあったであろうということはおそらく否定できない。しかし、「自然」と「人間」の関係という観点から慎重に読むと、自然に対し一見楽天的な態度の奥に、人間の「不安」がところどころに潜んでいるのに気づく。

---

[28] см. *Сакулин*, указ. соч., ч.1, т.2, с.178-201. *Цехновицер О.* Предисловие —— В кн.: *Одоевский В.Ф.* Романтические повести, Л., 1929 (Reprint: Oxford 1975), с.17-19. *Муравьев Вл.* Русский фауст —— В кн.: *Одоевский В.Ф.* Последний квартет Бетховена. повести, рассказы, очерки, Одоевский в жизни. М., Московский рабочий, 1982, с.32-34. ダルコ・スーヴィン『ＳＦの変容。ある文学ジャンルの詩学と歴史』大橋洋一訳、国文社、1991、p. 375-377。

「我々は電動列車を降りて、おとなしく徒歩で隕鉄の山の間を通り抜けてゆかなければならなかった。この時、海は嵐だった。灰色のカスピ海は我々の頭上でうなり、今にも我々の方に崩れ落ちてくるかと思えた位だった。実際、隕石がもう数サージェン離れたところに落ちていたならば、トンネルはきっと穴が開き、怒り狂った海が、人間の大胆不敵さに復讐していたことだろう。」（350-1）

「外は激しい吹雪だった。送風機が巨大な穴から、絶えず大気に膨大な量の熱を放出しているにもかかわらず、私はガラスの外套にしっかり身を包まなければならなかった。」（368）

カスピ海の下にある地下トンネルや、冷たい気候を温暖な気候に変える送風機といった人間の偉大な技術の成果も、ここでは「怒り狂った海」や「激しい吹雪」といった自然の脅威に対して全く無力である。つまり、人間が技術の力で自然を征服しているのはあくまでも一部であって、一方では自然がその荒々しい本性をむき出しにして人間に報復するという面も依然として存在しているのである。

人間の生活を根底から変えると考えられている点では『4338 年』のテクノロジーの産物の中でも最も重要な**気球**でさえも例外ではない。気球は重力の束縛から人間を解放し、空中へと人間の生活圏を拡大することで、人間の社会そのものも大きく変革する。「極めて注目すべきことは、いわゆる生活環境というものはみな、一定空間、すなわち平面においてのみ成り立っているということである。だから、商業、産業、居住などの環境はみな空中においては全く別のものになるだろう」（ﾊﾞﾘｱﾝﾄ、385）。その一方、気球によって生活圏が上へ上へと拡大されるにつれ、人間の視野に入ってくるのは「月」である。「月へゆく手段が見つかった。月は無人の地であり、ただ様々な生活の必需品を地球に供給する源となるにすぎない。こうして膨大な人口のせいで地球に迫りつつある破滅を避けるのである」（ﾊﾞﾘｱﾝﾄ、386)。こうして『4338 年』において、気球は、人間の文明の、いわば上昇するベクトルとなって、人間の生活圏を宇宙的規模で拡大する可能性を秘めていると考えられている。しかし、この人間の上昇するベクトルに対し、まるで人間を地球へと押し戻そうとするかのように、真っ正面からぶつかってくるものが『4338 年』では存在していることを忘れてはならない———それは宇宙の彼方から地球へと飛来する**彗星**である。

4338 年の世界は 1 年後に彗星の衝突を控えているという設定は、輝かしく列挙されるテクノロジーの成果の陰にしばしば見逃されがちである。確かに、発達した科学技術の力ゆえに、4338 年の人々は彗星の接近に何の不安も抱いていないように見える。学者たちは彗星の落下に科学の力で対抗しようとし、上流社会の人々は人間の技術の勝利を疑っていない。しかし、そうした人々の態度は、実は必ずしも絶対的な確信に裏づけられたものではないという点に注意したい。ある上流社会の男は、磁気催眠中に、「彗星など恐れていないふりをしているが、実はあれが近づいてくるのがひどくこわいのだ」と本音を洩らす（367）。そして、『4338 年』の語り手であるツィンギエフは次のように友人に書き送るのである。

「しかし、ここでも、大きな**不安**が広まっているということを君に隠しておくわけにはいかない。空中駅では、僕はロシアの電動気球大臣が天文大臣と一緒にいるのを見かけた。彼らの周り

には多くの学者たちが群がり、電動駅逓気球や普通の気球を検査し、様々な工具を動かしていた。——**不安**が彼らの顔に浮かんでいた。問題は、友よ、ハレー彗星の落下が、いうなら彗星の地球との合体が決定的なことだ。」（352）

「不安」が彗星の接近を目の前にした人々の心の中に潜み、科学の進歩を謳歌する 4338 年の世界の楽天的な気分に水を差している。しかし、人間の危機は、この作品において、嵐や吹雪、彗星の接近といった外的自然との戦いだけにあるとオドエフスキーは考えていたわけではなかった。現在残されている『4338 年』の本編にははっきりと書かれてはいないものの、人間の危機は人間自身の内部にある問題によってももたらされるという問題意識も『4338 年』の構想の中には本来存在していた。次のようなバリアントの覚え書きがそのような問題意識を反映している。

「ペテルブルグ書簡（2000 年後）において。人類の生来の肉体は、知能の発達が要求する働きを満たし得ないという認識に達する。つまり、知的活動が作り出し考えついた目的と比較すると、人間のとる手段はその目的にはふさわしくないと考えて、すべての人は希望のない悲しみに沈む。人類はみな瀕死の病気になる。」（387）

こうして『4338 年』では、彗星に代表される外的自然との闘いだけではなく、「人類の生来の肉体」という人間自身の抱える内部の自然性の克服も、本来人間が解決すべき重要な問題として提示されるはずであったということがわかる。すなわち、人類が存続してゆくためには人間は内的に変革される必要があるという問題意識がここで提示されているのである。このようなことを念頭において『4338 年』で描かれている世界を見ると、それは決して単なる楽天的なユートピアとはいえない。つまり、人間は外にも中にも危機的要素を孕んでおり、それに対し何らかの対策を講じない限り人間は滅亡するというという緊張感がその輝かしい未来絵図の中に隠されているのである。その点で、レヴィツキーが『4338 年』を「望ましいユートピア（a desirable Utopia）」というよりもむしろ「警告的なユートピア（an admonitory Utopia）」と見なしているのは正しいと言えるだろう[29]。

しかし、『4338 年』は最終的に完成しなかった。それゆえ、残された形では、人間たちは結局彗星の接近をくい止めることができたのか、その時自然や人間には何が起こったのかということは明らかにされなかった。すなわち、この作品においては、自然と人間の闘争の解決、そして人間自身の変革の可能性という問題は、問題として提起されただけで、具体的な解決策は提示されないままとなったのである。

しかし、『4338 年』の発表に先立つこと１２年前、極めて神秘的な形にせよ、この問題の具体的な解決策を曲がりなりにも提示した短編小説をオドエフスキーは書いていた。それは『地球の生活における２日（Два дни в жизни земного шара）』（1828）である。この作品も、『4338

---

[29] *Levitsky A.* V.F.Odoevskij's The year 4338: Eutopia or Distopia? —— In: The Supernatural in Slavic and Baltic Literature: Essays in Honor of Victor Terras. Slavica Publishers, Inc., Ohio, 1988, p.72-82.

年』年同様、彗星の衝突による破滅を目の前にした世界を描いている。話は次の通りである。人々は地球の破滅を恐怖を抱いて待っている。ただ８０歳ほどの長老一人だけが落ち着きを保ち、地球の無事を確信している。結局、恐ろしい嵐が地上を通過し、夜が終わると、地球は無事だったことがわかる。長老が考えたように、彗星は地球の破滅をもたらさなかったのである。不完全さや偏見や病気を克服した人間たちは、全世界的な厳かなカーニバルのうちに、来るべき世界の変容を待ち受けることになる。

「地球全体の宴がやってきた。この宴には荒々しい喜びはない。声高な叫びも聞こえないのだ！〈…〉もうはるか昔に、人々は人が人となることを許さぬ困難を乗り越えていた。もう粗末な物質が精神の努力をあざ笑い、必要が必然に屈服した時代の記憶は消え失せた。はるか昔に、不完全と偏見の時代は人間の病と一緒に去り、地球は全能なる王者だけの住処となっていた。〈…〉晴れがましい思いがみなの顔に輝き、みながこの無言の雄弁を理解していた。静かに地球は太陽に近づき、まるで霊感の炎のごとく、熱のない炎熱が地上に広がった。一瞬のうちに、天（небесное）は地（земное）となり、地は天となり、太陽（Солнце）は地球（Земля）となり、地球は太陽となった……」[30]

このようにしてこの作品では彗星＝外的自然との衝突は仮象であって、人間の変革を促すきっかけにすぎなかったことがわかる。すなわち、『4338 年』では提示されなかった自然と人間の闘争の解決、そして人間自身の変革は、太陽と地球の合体という壮大なヴィジョンのうちに、ここで１つの解答が与えられているのである。だが、同時に、この解答は、あまりに簡潔で曖昧で神秘的な描写に紛れ込んでいることも否定できない。最後の天と地の合一、太陽と地球の合一は一体何を意味するのだろうか[31]。これは文学的表現としては極めて印象的であっても、そこでは人間の変革の具体的な過程は何一つ明らかにされておらず、変革そのものがあまりに唐突に実現しているという印象を受ける。あるいは、もし後に『4338 年』が完成されていたら、この人間の変革のヴィジョンはもっと具体的に提示されていたのかもしれない。しかしそれは結局実現しないことであった。

とはいえ、このように『最後の自殺』『名前のない町』から『4338 年』『地球の生活における２日』へとオドエフスキーの「ユートピア小説」を見てゆくと、自然と人間の闘争が宇宙的規模まで拡大され、その解決の鍵は人間自身の変革にあるとされていることがわかるだろう。こうして人間が己の内や外の物質的自然を克服し自分自身の新しい変革を果たすとき、初めて「粗末な物質が精神の努力をあざ笑う」ことも、「必要が必然に屈服する」こともない人間と自然のあるべき姿が実現するのである。

---

[30] Взгляд сквозь столетия. Русская фантастика XVIII и первой половины XIX века. М., Молодая гвардия, 1977, с.222.

[31] レヴィツキーは、シェリングの同一哲学の観点からこの神秘的合一を解釈している。cf. *Levitsky*, op. cit., p.77-9.

6．結び

以上の考察をまとめてみよう。オドエフスキーのシェリング受容は一般に思われているほど単純ではない。通常同一視されることも多いドイツ・ロマン主義のシェリング理解とオドエフスキーのそれは、それぞれの「自然」観に注目するとき、相違点が明らかになる。すなわち、ノヴァーリスなどドイツのロマン主義者たちがシェリング哲学を評価したのは、その「自然哲学」によってであり、「生ける自然」という考え方によってであった。一方、オドエフスキーは、シェリングの「自然哲学」よりは「先験哲学」の方を重視する。というのも、彼にとって重要なのは、自然の神秘よりは、**人間の魂**の神秘であったからだった。それゆえ、彼の自然観そのものは、人間の精神の独自性と対比される結果、17 世紀から 18 世紀にかけて確立された機械論的な自然観にかなり近くなり、ロマン主義的なというよりは啓蒙主義的な要素が強くなる。

しかし、一方では、彼は、機械論的な自然観がしばしば陥りやすい、自然と対立しそれを支配しようとする近代的悟性には批判的な立場をとった。シェリングやドイツのロマン主義者たちが自然の中に精神と同一の原理を見いだすことでこの近代的悟性の陥穽を克服しようとしたのに対し、オドエフスキーは、詩的な自然の理想化がしばしば見逃しやすい自然と人間の負の関係、つまり**自然と人間の闘争**を強調することでこの近代的悟性の問題点を明らかにした。すなわち、人間が非人間的な算術という物質的自然の発想で己も自然もとらえる限り、自然は人間の敵となる。なぜなら人間が己の独自性を自覚するときにのみ、また自然も生かされるとオドエフスキーは考えるからである。そこで、人間と自然が理想的な関係になるために、己の独自性を発揮すべく人間自身が変革を果たさなければならないという新しい課題が生じる。この課題を最もよく示しているのが彼の「ユートピア小説」であり、そこでは地球的・宇宙的な規模でこの課題がとらえられているのである。

だが、同時に、この自然と人間の理想的関係のあり方、あるいはその前提となる人間自身の変革のヴィジョンについては、オドエフスキー自身、『地球の生活における２日』におけるような漠然とした形でしか提示できなかったということも指摘しておかなければならない。あまりに多方面の知識に関心を持ち、同時に社交や官吏の仕事で多忙であった彼には、それを具体的かつ体系的に提示する余裕も根気もなかったのかもしれない。しかし、彼の提起した自然と人間に関する問題意識は、現代のエコロジー、あるいはフョードロフやヴェルナツキーなどのロシア・コスミズムの思想家たちによって受け継がれ発展させられることになるのである[32]。

付記

本稿で多数引用される『ロシアの夜』と『4338 年』に関しては、引用の後にページ数を記し

---

[32] Русский космизм. Антология философской мысли. сост. С.Г.Семеновой. А.Г.Гачевой, М., Педагогика-Пресс, 1993, с.34-38 では、オドエフスキーは、ロシア・コスミズムの文脈でフョードロフやヴェルナツキーの先駆者として評価されている。

て処理した。それぞれの引用、あるいはページ数は以下の版による。

『ロシアの夜』

Одоевский В.Ф. Русские ночи. Л., Наука, 1975

(文献の明示が必要なときはPHと略記)

『4338年』

Одоевский В.Ф. Романтические повести. Л., 1929 (Reprint:Oxford,1975)